
赤い帽子と白い杖

緋緘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い帽子と白い杖

【Zコード】

Z0693D

【作者名】

緋纓

【あらすじ】

花にしてみれば、何一つ価値なんてわからない。自分を捨てた両親も、大好きだった兄も、自分自身も。今ではただ一人だけ、自分のことを見知らぬ男だけが、花に優しかった。

第一話

なぜ、と。

よく聞いてくる子だつた。

それは夏の暑い日の記憶。
縁側で涼んでいた男は口角を下げたまま、自分で走り鳴る子供を不思議そうに見ていた。

* * * * *

白檀の匂い。

古から今まで消えずにその芳香を放ち続ける、この厳かさはなんだ
らう。

「そろそろ起きて帰りなさい」

言われて花は、悪戯を見咎められた子供のように、びくっと身を震わせた。
窓からは夕日が差し始めている。

そんなことはとっくに気がついていた。

太陽が傾いていく過程はスローモーション再生されるビデオのよう
で、なんとなく、それが見えなくなるまで見ていたかつた。

学校の後にそのままここに立ち寄つて、花は寝転んでいた。
白檀のにおいがする古い家屋で、つるりとした床に頬を寄せた。
猫のように身を丸め、とは言つても眠るわけでもなく、その田はさ

ながら警戒心を解かない番犬のように、何かを見据えていた。

「・・・まだ早いよ」

「早い?」

隼人は器用に肩眉だけ持ち上げて聞き返した。
二十歳そこそこのはずのこの人は、妙に落ち着いていて、花にはとても兄と同年代とは思えなかつた。

「今日は・・・」

せめて今日だけは。

言いかけた言葉を奥歯で噛み殺した。

言葉を選んで、動搖を隠しながら声を発した。

「・・・今日は、見たいテレビもないし」

隼人はいつだつて目だけで笑う。
しうがないな、やつぱり子供なんだな。
そう言われてるのがすぐ分かる。

ねえ、私、そんなことないんだよ?

「大事な娘さんに何かあつたら、天国の『両親に会わす顔が無いからね』

「・・・うちの親知らないくせに」

そう、あなたは本当に何も知らないね。

心の中で毒づいて、花は笑つた。

「・・・もう帰るね」

「そうした方がいい」

一体この人は、女子高生をどんな生物だと思っているのだろうか。
花にはこの男の思考がさっぱり読めなかつた。

時々なんとなく、隼人はこんなことを思つているんだろうな、と考
えてみる。

けれどそれはまるで蜃氣楼のよつで、本当はそこには無い、別のも
のを映し出した幻だ。

カタン、と音を立てて、花は木造の家を出た。
古いけれど、汚くはない。

むしろ美しいとさえ思える、温かい家。

初めて花がこの家に入つた時、清められた気がした。
隼人はここに独りで住んでいる。

「家族は？」と聞いたことがある。

その時、隼人は何も答えず笑つた。

振り返ると、隼人がこちらを見てひらひらと手を振つて見送つてい
た。

だから花も振り返つて、ぶんぶんと大きく腕を振つた。

「また明日っ」

にこつと笑うと、隼人は少し困つた顔をして笑つた。

その表情を見て、花の顔が曇る。

さつと隼人から目を逸らして、顔を顰めた。

お願ひだから、私がここに来ることを拒まないで。

この家に来ることが、私の清めの儀式なのだから。

第一話（後書き）

「意見・感想がありましたら、ぜひお聞かせください。励みにさせていただきます。

第一話

初恋は兄だった。

それは丁度十年前。

花が小学生になつたばかりのころ、母が再婚した。
母の再婚相手の子供だつた圭介は、花より六歳年上で、いつでも花に優しかつた。

小学校で、花がいじめられたことがあつた。

クラスのリーダー格の女の子がずっと好きだつた男の子が、自分は花が好きだと言つたのだ。

いともあつさりと、周りには誰も居なくなつた。

女の子は誰も花とは口を利いてくれない。

落書きされた机を、放課後に一生懸命綺麗にする。

ぼろぼろにされた教科書は張り合わせる。

さみしい。

泣きながら一人で帰つていると、その頃中学生だつた圭介がいつの間にか横にいて、ぽんと肩を叩かれた。

泣き顔を見られたくないが、どうしようもなく、涙がぽろぽろと出てくる。

花は圭介に抱きついた。

圭介にしてみれば、何のことか分からなかつただろう。
だが少しうるたえてから、頭をゆっくり撫で、繰り返し呟いてくれ

た。

大丈夫。

大丈夫だよ。

俺が全部なんとかしてやるから。

その言葉を聞くと、魔法にかかつたように、自分が落ち着いていくのが分かった。

数日後、花にクラスの女の子たちが謝つてきた。

どうやらリーダー格の女の子の指示らしかったが、花は嬉しかった。後から知つたが、どうやらその時問題の二人が付き合い始めたようで、もう花をいじめる必要も無かつたのだろう。

その日は、友達と遊んで家に帰つた。

家に帰ると圭介が居て、元気に居間に入つてきた花を見て、優しく笑つてくれた。

「良かつたな、花」

* * * * *

「花、好きな人いるの？」

中学生になつて、凛が尋ねてきた。

花は曖昧に首を振つて、否定の意味を示した。

「じゃあなんで中田先輩のこと振づちやつたの？」

凛が訝しげる意味は分かる。

女子の間では確かに中田は有名だつた。

花から見ても、素直にカッコいいし、人気があるのも頷ける。

凛の追求に花は軽く唸つてから、

「・・・別に今は付き合つたりしたくないから」

と、無難に答えた。

中学生になつて、お兄ちゃんが大好きとは表立つて言えなくなつた。血が繋がつていないと云え、やはり普通でないことは花自身理解していたし、圭介との関係にこれ以上望むものも無かつた。

家に帰れば圭介がいる。

地元の大学に進学した圭介は、何年経つても優しく、花の一一番の理解者であつた。

中学に上がる前程から喧嘩が絶えない両親を見る不安も、圭介さえいれば平氣だつた。

大丈夫だよ。

花は何も心配しなくていいから。

優しい優しい言葉。

兄の言葉を何よりも信じていた。

花が中学三年生になつたある春の日、家に両親が一人とも不在の日があつた。

花は気にも留めなかつた。

二日過ぎ、三日過ぎ、一週間過ぎた頃、ようやく花は、二人は一度と戻つて来ないと気がついた。

第一話（後書き）

「J意見・「J感想があればぜひお寄せください。」

第三話

花が中学三年生の夏、圭介は大学を中退した。

花は何も心配しなくていい。

圭介は口癖のようにそう言つていた。

後から知つたが、圭介は高校時代の先輩と一緒に、コンピューター関係の企業を興していた。

花は日に日に不安になつていつた。

会社といつ名のマンションの一室に籠りきりの圭介は、たまにしか家に帰つてこなくなつた。

運良くその時圭介に会つと、不安そうな顔をした花を見て、圭介は少し困つた顔をする。

ごめんな。

母さんまでいなくて不安だろ?

大丈夫。

花は何も心配しないでいいから。
ちゃんと高校には行かせてやるから。

花はぶんぶんと首を横に振つた。

圭介は泣きそうな花を見て戸惑っていた。

それから、そつと壊れものを触るように、花の頭を撫でた。

違う違う違う。

花は声にならない声で叫んでいた。

両親が居ないことのショック以上に、いつも一人きりの家が、兄の帰つてこない家が辛かつた。

「・・・お兄ちゃん・・・」

ふらりと力無くもたれかかるかのように、花が圭介にしがみ付いた。一瞬だけ体を揺らした圭介は、すぐにいつもの優しい声で、花を宥めた。

鼻をすする妹にどうすることもできず、圭介は自分よりずっと低い位置にある、その小さな頭をただ撫でていた。

* * * * *

花は詳しく知らないが、どうやら会社は順調に進んでいったようだ、圭介は益々家に帰らなくなつた。

会社が成長していく間、花も無事、高校生になつた。

中学での数少ない女友達であつた凜も、同じ高校に進んだ。

兄離れをしなくてはという想いが、花の心に持ち上がり始めていた。

学校内でふと考へ付いて隣を見る。

自分の隣を歩く凛は、友達という先入観無しに見ても、美人だつた。

中学から今まで、どんどん綺麗になつてゐる気がした。

お互にそれほど干渉しない関係だった二人は、それでも仲が良く、一緒に行動することが多かつた。

「・・・ねえ凛、」

歩きながら自然に聞いてみる。

「ん？」

「・・・・・・・・男の子、紹介して」

聞いた瞬間、凛が歩いていた足をピタリと止めた。
啞然とした顔で、まじまじと花を見ている。

「えっと・・・花？」

「え、何？」

「急にどうしたの？」

凛が不信そうに花を見る。

花はなぜだか冷や汗が出る。

「え・・・つと、彼氏とか、欲しい・・・かな、って」

凛の顔が驚愕に変わつた。

次いで、喜びの顔に。

「花・・・ツ！」

「は、はい？」

「やつとあなたもまともに恋愛する気になつたのね・・・」

何のことだか分からない。

花はあまりに感激する友人に少し引いてしまった。

「大丈夫、付き合つてゐるなら花はすぐ彼氏できるよ」

「へ？」

「だつて、花モテるでしょ？」

・・・モテ？

それは凛のことではないのか。

「花があんまり男に興味無もそつだから、男子の中で、私と花が付き合つてゐるつて噂まであつたんだよ」

・・・・・・へえ。

男子たちの短絡的過ぎる発想に呆れてしまつ。思わず圭介と比較してしまい、兄のことがまた恋しくなつた。

「良かつたよ花、これで高校生活も楽しくなるね

上機嫌の友人。

花にとって、凛は親友とは少し違つた。

すこく仲が良くなつても、最後の最後で、お互いの大重要な部分を隠して守つている。

プライドの高い猫みたいな一人。

悪くない。

花はこの関係に満足していた。

そして凛が言ったとおり、間もなく花には、初めての彼氏が出来る
ことになる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0693d/>

赤い帽子と白い杖

2010年10月17日10時46分発行